



平成25年 1月15日発行

発行者
公益社団法人 新潟県植物防疫協会
〒951-8133
新潟市中央区川岸町三丁目21番地3
☎ 025 (233) 2839
FAX 025 (233) 8018

新潟県GAP規範に基づく GAPの推進について

1 GAPとは

GAPとは、「農産物の安全」、「環境の保全」、「作業者の安全性」等を確保するため、農業生産活動に潜む様々なリスクを軽減する活動であり、産地や農場の問題点を見つけ出し、それらを改善することによりリスクの発現を防止して、人と環境に優しい持続的な農業を実践する取組です。

2 新潟県におけるGAP推進の取り組み

県では、消費者の「安全・安心」な農産物へのニーズに応え、県産農産物等への信頼性を確保するとともに、環境負荷軽減や労働安全に配慮し、持続的な農業生産に資するため、JAや産地等へのGAPの導入・実践を推進しています。

その結果、平成23年12月末現在で、水稻、園芸、きのこでは232産地等においてGAPが導入されています。これは1つの成果であります。導入されているGAPの多くは確認項目を絞った基礎的な取り組みであり、今後は「農産物の安全」や「環境の保全」、「作業者の安全性」など幅広い分野を対象に取組内容を高度化していくことが重要です。

3 新潟県GAP規範の策定

このため、県では、農業者のGAPに対する一層の理解促進を図り、自発的な取り組みを進めて、様々なリス

《主 な 内 容》	
新潟県GAP規範に基づくGAPの推進について……	1
いちご「越後姫」の苗の温湯浸漬による	
うどんこ病防除技術……	2
平成24年産米に発生した着色米……	3
イネカラバエの生態と防除対策……	4
農薬実証は成績の概要について……	5
NOSA I 中越無人ヘリオペレーター	
連絡会の活動について……	6

クに対応するGAPの効果を着実に発揮するため、取組の意義や、関係する法令等の根拠、並びに適切な実践方法を明示した「新潟県GAP規範」をこのたび策定しました。

なお、新潟県GAP規範は大きく3章で構成されています。

第1章は総論として、GAPの基本的な考え方や、農業生産活動に潜むリスク等について説明し、第2章では、農業者や産地が規範に基づいて行うGAPの具体的な実践方法を説明しています。

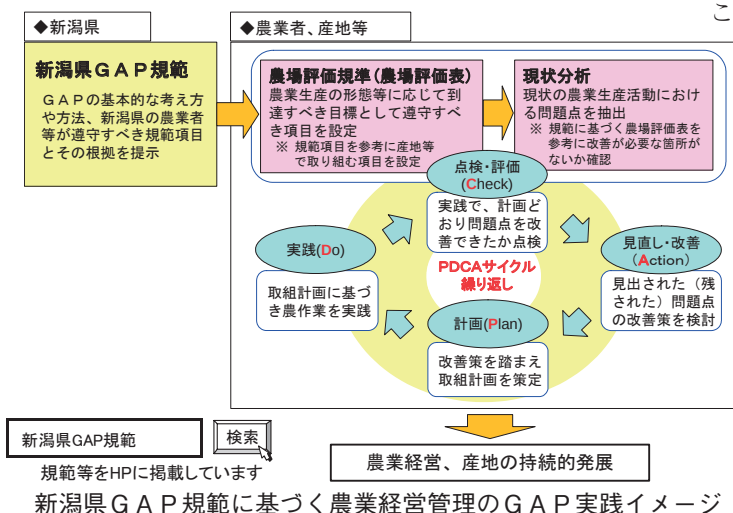
また、第3章では、農業に関する法令や科学的知見に基づき、農業生産現場で想定される様々なリスクを踏まえて、本県農業者が留意すべき55の規範項目を示し、その根拠や、具体的な取組事項、改善効果等を解説しています。その中で植物防疫に関する事項については、「農作物の安全」や「環境の保全」だけでなく、農薬散布における服装等についても「作業者の安全性」の視点から説明しています。

4 今後の取組推進

この規範を活用し、自らの農業生産活動を点検し、必要に応じて改善を行うことにより農場や産地でも、安全・安心な農産物の生産と農業経営の持続的発展、ひいては消費者の信頼確保につながることを期待しています。

県としては、今後、関係機関等と連携しながら、この「新潟県GAP規範」の周知を図るとともに、農業現場における問題点の確認や適切な指導助言ができる産地指導者の養成、並びにモデル的に取り組む産地を支援するなど、新潟県GAP規範に基づく取組の実践を進めていきたいと考えています。

(新潟県農林水産部農産園芸課 滝澤 卓朗)



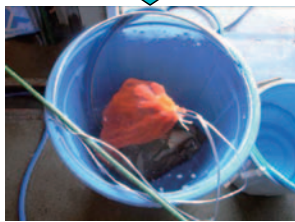
いちご「越後姫」の苗の温湯浸漬による うどんこ病防除技術

新潟県のいちご栽培は、「宝交早生」などの品種から平成8年に育成された良食味品種の「越後姫」へと切り替わり、現在は作付面積の9割以上を占めています。また、栽培方法では促成栽培が普及し、近年では花芽分化促進処理による早期出荷作型が増加してきています。越後姫栽培においては、うどんこ病の発生が大きな課題となっています。そこで、イチゴうどんこ病の新たな防除技術として、いちご「越後姫」の苗の温湯浸漬によるうどんこ病防除技術（平成24年度新潟県農林水産業研究成果）を開発したので、紹介します。

本技術は、農薬では完全に抑えることが難しいイチゴうどんこ病を、温湯という物理的手法により発病を無くすものです。大量に処理しやすいことから、空中採苗のランナーから切り離した子苗に行います。手順は、①越後姫の空中採苗直後の苗を水稻の種粕浸種用のポリエチレンのネット（60cm×40cm）等に100本程度入れる、②ポリエチレンネットに入れた苗を50℃の温湯に3分間浸漬する。浸漬中は苗が浮き上がらず、気泡が残らないように、苗を沈めながら揺する、③浸漬後直ちに水道水等で1分間冷却する、④冷却後は通常の栽培と同様にポットに挿し苗し、育苗する、というものです。準備する温湯は、水稻の種粕消毒用の機器を用いたり、温度変化しない家庭用の給湯器によるかけ流しで行うことができます。浸漬する温湯の温度は、45℃で効果が認められなくなり、55℃で枯死株が発生するため、温度むらが出ないように正確に50℃で処理します。家庭用給湯器で行う場合は、必ず正確な温度計で計測してください。水稻の種粕消毒器（湯量200リットル）で処理する場合、



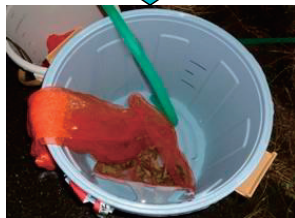
①空中採苗の子苗を切り離し、ポリエチレンネット（60cm×40cm）に100本程度入れる。



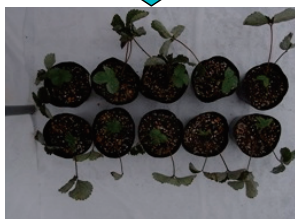
②ポリエチレンネットに入れた苗を50℃の温湯に3分間浸漬する。

1) 写真は温度変化しない湯沸かし器によるかけ流しでの処理。

2) 苗が浮き上がらないように棒などで沈め、気泡が残らないようにする。



③常温の水道水で1分間直ちに冷却する。



④通常の栽培と同様にポット育苗する。

図 苗の温湯浸漬防除の手順

温湯を準備する時間を除く浸漬作業時間は、10a分の苗（7000株）で約1時間程度です。

温湯浸漬後の苗はうどんこ病の発病が見られなくなります。ただし、防除効果は持続性が無いため、再感染させないことが大切です。予め空中採苗した子苗を全て水につけて、うどんこ病の分生子の飛散を抑えた後に浸漬を始めるようにしてください。また、うどんこ病発病ハウスに入った人は浸漬後の苗に近づかないようにすることや、周囲にうどんこ病に感染したいちごを置かないようにする必要があります。浸漬後の苗には葉先や葉縁に焼けが見られることもありますが、定植時の生育に悪影響はありません。

温湯浸漬によるイチゴうどんこ病防除では、再感染しなければうどんこ病防除が不要となります。さらに、薬剤を使用しないため薬剤耐性菌の対策としても有効です。何より農薬散布にかかる経費と労働時間が軽減されます。また、うどんこ病だけでなくワタアブラムシに対する効果も認められています。本技術はいちごのIPMの1手法として活用することが期待できます。今後は新潟県の越後姫栽培において、本技術を活用したIPMの普及推進を図っていききたいと思います。

（園芸研究センター環境・施設科 佐藤 秀明）

植防一口メモ

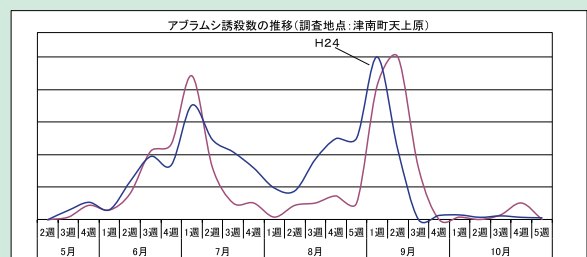
ユリ球根養成で問題となるアブラムシ類の発消長について

十日町地域は国内有数のオリエンタル系ユリ切花の産地です。このうち、「カサブランカ」などの主力品種は、オランダから輸入した球根を1年間養成栽培し、大きくした球根を切花に用います。この養成栽培の際、アブラムシ類が媒介するウイルス病にかかることがあり、近年問題となっていることから、適切な防除体系の構築に向けて、当地域のアブラムシ類の発消長を黄色水盤誘殺トラップで調査しました。

昨年、今年の2年間の調査の結果、アブラムシ類は7月上旬と9月上旬の2回、発生ピークがあることが分かりました。特に1回目のピークは梅雨時期に当たるため、降雨により薬剤防除がしづらく、ウイルス病媒介の危険度が高いと言えます。

多くの農家は、アブラムシがコロニーを作った段階でやっとアブラムシがいることを認識します。しかし実際はコロニーを作る前から、ほ場周辺からアブラムシは飛来しているのです。今後は、この結果をもとに適期薬剤防除と障壁作物の利用などの耕種防除を組み合わせることで効果的な防除体系の構築に取り組んでいきたいと思います。

（十日町農業普及指導センター 平山 喜健）



平成24年産米に発生した着色米

本年は、着色米の発生が近年に比べ多く、格落ち理由の上位となった地域もありました。着色米は、農産物規格規定で「粒面の全部又は一部が着色した粒及び赤米をいう。ただし、とう精によって除かれ、又は精米の品質及び精米歩合に著しい影響を及ぼさない程度のもを除く。」とされています。等級別の混入最高限度は、1等で0.1%、2等で0.3%、3等で0.7%となっています。

発生原因

着色米は、主にカーブラリア菌、アルタナリア菌等の菌類（カビ）の感染による褐色米（図1）であることが多く、今年発生した着色米のサンプルからも、上記の菌が多く分離さ



図1 褐色米の症状（左：褐色米、右：健全米）

れており、主な原因と推定されます。カーブラリア菌、アルタナリア菌のどちらの影響が大きいかは、地域によって異なり、同じ地域でも年次によって主な原因菌の種類が異なる場合があります。これは気象や畦畔雑草の状況など様々な要因の影響を受けるためと考えられています。

カーブラリア菌、アルタナリア菌は、水田の畦畔雑草やイネの葉などの上に存在し、特に枯死葉で多量の胞子を形成します。このようにしてできた胞子が空气中に飛散し、開花中のイネの穎内に落下し感染します。玄米の症状は感染の約30日後頃から認められるようになります。褐色米の発生は、玄米にしないと判らないため、籾摺り段階で被害に気づくことになります。

多発生する条件

褐色米は今年のように夏の高温・乾燥条件やフェーンに遭遇すると発生しやすくなります。これらのストレスでイ

ネの老化が進んだり、抵抗力が低下して病原菌に感染しやすくなるとともに、畦畔雑草の枯死やイネの下葉枯れが多くなり、その上で菌が増殖し、多量の胞子が飛散します（薬剤の効果試験では、褐色米を発生させるため、出穂の7日前頃に除草剤を使って畦畔雑草を枯らし、病原菌の胞子飛散を促すこともあります）。また、出穂後早期の落水も、褐色米の発生を助長します。

発生防止対策

褐色米の発生を抑制するには、イネ体質の健全化や伝染源対策などの耕種的防除を基本に、多発生した地域では薬剤防除を組み合わせる必要があります。

イネ体質の健全化としては、栽培管理の基本技術を守り、適切な肥培管理を行います。また、フェーン現象が予想される場合には、湛水などの水管理を行い、イネの損傷を軽減してください。さらに、出穂後の早期落水を避け、イネ体の活力維持を図ります。

伝染源対策としては、出穂期頃に畦畔の枯死雑草やイネの下葉枯れが少なくなるように管理します。具体的には、除草剤による畦畔除草を行う場合は、出穂期の1ヶ月前までに行います。草刈り機で除草する場合も、刈った草を持ち出すなどして処分します。

毎年被害が発生する地域や、今年被害の多かった地域では、変色米に登録のある薬剤による防除の実施を考慮します。

これらの対策をしても着色米の混入が認められた場合は、色彩選別機を利用し、着色米を除去することで被害軽減を図ることができます。

（作物研究センター栽培科 石川 浩司）

新潟県の茄子事情

関東の種苗業者が新潟で会議をするということで、新潟の特色ある野菜の話を頼まれ茄子について講演をしたときのこと。

新潟県は茄子王国で栽培面積は約684haで全国第1位を誇る。（平成21年農水省調べ）だが、収穫量は8280トンで6位、出荷量に至っては2570トンと17位に後退する。その理由としてはまず収穫期間が短いこと、新潟の茄子の収穫期間は7～8月に集中し、さらに露地栽培が中心であり強風で軟らかい実が傷付くなど天候に大きく左右されること、また、十全茄子など収量は多くないがとにかくおいしい品種を作っていること、そしておいしい茄子は市場出荷しないで自分たちで食べてしまうことが出荷量の順位後退の大きな要因であることなどの内容の話をした。店主たちは「なるほどこういうことで新潟の茄子が関東に出回らないわけだ」と大いに納得して帰られた。ちなみに出荷量1位は茨城県である。

（北越農事株 渡辺 義貴）

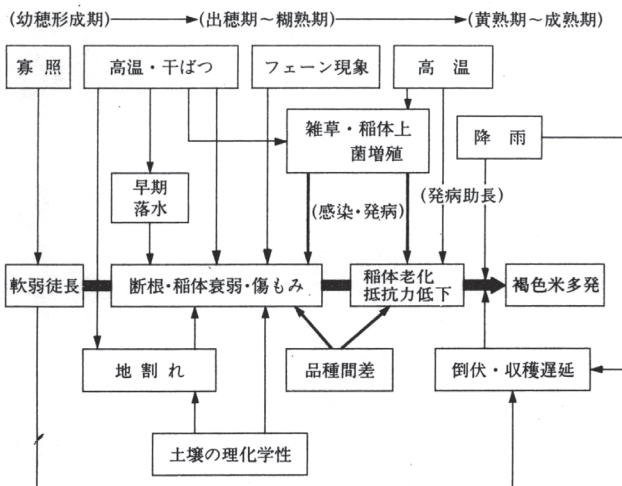


図2 褐色米の多発要因（想定模式図）（竹谷ら1981）

イネカラバエの生態と防除対策

1 はじめに

イネカラバエは、1950年代には全国的な水稻の重要害虫でした。その後、栽培環境・栽培様式の変化や防除対策の確立により発生量は減少し、近年では本種を対象とした薬剤防除はほとんど行われていません。しかし、10年ほど前から下越地域の山沿いを中心に、「五百万石」等の一部品種で被害が目立つ事例が発生しています。

今回は、本種の発生生態と防除薬剤の効果について、防除所が行っている調査事例とともに紹介します。

2 発生消長と生態

本種は、東北以北では年2回、関東・北陸以西では年3回発生します。新潟県はその境界にあたり、村上市朝日、神林、関川村では年2回、新発田市の平野部以南では年3回発生するとされています。

本種の発生消長は、年2回発生地帯では、越冬世代が6月中旬～下旬に羽化し、イネの葉裏等に産卵します。ふ化幼虫は茎の中に潜り込み、葉や幼穂を加害、茎内で蛹化します。8月下旬～9月上旬に羽化した第1世代成虫は、イネではなく周辺のイネ科雑草に産卵します。一方、年3回発生地帯では、5月中旬頃に越冬世代が羽化してイネに産卵します。第1世代幼虫は葉を食害して茎内で蛹化、7月中旬頃から羽化し、再度イネに産卵します。ふ化した第2世代幼虫は幼穂も食害するため、加害された株は傷穂になります。9月中旬頃から羽化した第2世代成虫は周辺のスズメノテッポウやヌカボなどのイネ科雑草に産卵、茎内で幼虫まで发育して越冬します。

防除所では、近年被害が目立っている下越の山沿い地域で本種の発生消長を調査しました。その結果、越冬世代成虫は6月下旬頃、第1世代成虫は9月上旬頃に発生のピークが認められました。年3回発生の特徴である7～8月に成虫のピークは見られず、この地域の発生は年2回であると思われました(図1)。

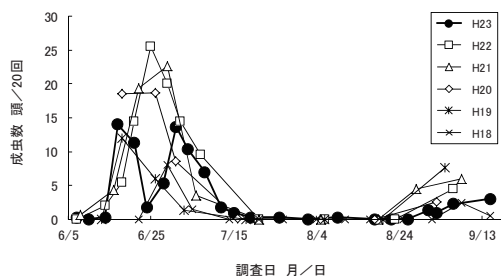


図1 イネカラバエ成虫の発生消長(水田内20回振りすくい取り調査)

注) 新発田市、村上市等で、H18～H23に2～6地点の調査を行い、年次ごとに平均した。

また、本種の被害程度は水稻の品種によって異なることが知られており、「五百万石」は被害程度が高く、「こしい

ぶき」と「コシヒカリBL」では低いことが、これまでの調査で明らかになっています。

3 防除対策

イネカラバエの防除は、効果の高い薬剤の登録が失効するなど、発生が問題となっている地域では対応に苦慮しています。その中で、イネミズゾウムシなどの水稻初期害虫の防除に使われている育苗箱処理剤のグラントオンコル粒剤が、最近イネカラバエにも使えるようになりました。

防除所では平成21年から、グラントオンコル粒剤を処理した水田で本種に対する効果を調査してきました。調査地点は胎内市と村上市の計5地点で、各ほ場に無処理区を設け、傷穂発生程度

を比較しました。結果は調査事例によるばらつきが大きかったものの、被害を無処理区の半分以上に抑制できなかった事例が多く、期待する効

果は得られませんでした(図2)。また、初期害虫の箱処理剤として現地で使用されているフェルテラ箱粒剤についても調査したところ、グラントオンコル粒剤と同様で、十分な効果は得られませんでした。なお、フェルテラ箱粒剤はイネカラバエには登録がないため、本種の防除を目的として使用することはできません。

以上のことから、イネカラバエは薬剤防除だけでは十分な効果が期待できないため、多発生が懸念されるほ場では、畦畔やほ場周囲のイネ科雑草をできるだけ除去することや、本種の被害が比較的少ない「こしいぶき」や「コシヒカリBL」を作付するなど、耕種的な防除方法も併せた対策が必要で

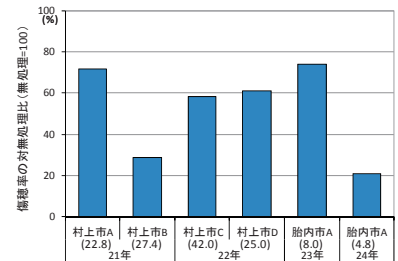


図2 グラントオンコル粒剤の防除効果

4 今後の課題

これまでの調査から、最近の品種に対する特性や発生消長など、いくつかの新しい知見が得られました。しかし、発生パターンの地域差や薬剤防除技術など、多くの課題が残されています。最近、有効薬剤の検討が他県でも進められており、将来的には新しい薬剤が使えるようになる可能性もあります。特に、他の害虫を対象として使用されている箱処理剤で、イネカラバエも対象害虫として適用拡大になれば種々の利点があるため、今後も箱施用剤の利用を中心に防除対策の確立を目指したいと思います。

(新潟県病害虫防除所 横山 泰之)

農薬実証ほ成績の概要について

平成24年度の農薬実証ほでは、殺菌・殺虫剤20剤、除草剤21剤の合計41剤を、延べ59か所で実証し、普及性を評価しました。12月10日に成績検討会が開催され、検討会参加者による熱心な検討により、それぞれの剤の評価が決定されましたので、その概要をお知らせします。

水稻の殺菌・殺虫剤では、従来とは異なる有効成分を含有する、1成分の種子消毒剤の効果が実証されました。また、近年問題となっている墨黒穂病に対する粒剤、粉剤の効果が確認されました。防除徹底を進める上での活用が期待されます。大豆では、防除が難しい土壌病害である、茎疫病を対象とした種子塗沫剤の効果が確認されました。

表1 普通作物殺菌殺虫剤

薬 剤 名	作物名	病 害 虫 名
シードラック水和剤	水稻	種子伝染性病害
イモチミン粒剤	〃	墨黒穂病
Zボルドー粉剤DL	〃	墨黒穂病
ルーチン粒剤	〃	いもち病
ランマンフロアブル	大豆	茎疫病
ボルテックスFS	〃	茎疫病
クルーザーMAXX	〃	茎疫病

表2 普通作物除草剤

薬 剤 名	作物名	病 害 虫 名
キルクサ1キロ粒剤	水稻	初期剤
アルハーブフロアブル	〃	初期剤
メテオ1キロ粒剤	〃	初期剤
クリアホーブフロアブル	〃	初期剤
ゼータワン1キロ粒剤	〃	初中期一発剤
ゼータワンフロアブル	〃	初中期一発剤
ゲットスター1キロ粒剤	〃	初中期一発剤
ザンテツ1キロ粒剤	〃	初中期一発剤
ムソウ1キロ粒剤	〃	初中期一発剤
アピロキリオMX1キロ粒剤	〃	初中期一発剤
ヤイバ1キロ粒剤	〃	初中期一発剤
フォローアップ1キロ粒剤	〃	中後期剤
オサキニ1キロ粒剤	〃	直播用一発剤
ゲットスターフロアブル	〃	初中期一発剤
ゲットスタージャンボ	〃	初中期一発剤
ピクトリーZジャンボ	〃	初中期一発剤
ヤイバジャンボ	〃	初中期一発剤
アンカーマンDF	〃	中後期剤
スケダチ1キロ粒剤	〃	中後期剤
ダイロンソル	大豆	水稻畦畔用

表3 野 菜

薬 剤 名	作物名	病 害 虫 名
リーフガード顆粒水和剤	ねぎ	ネギハモグリバエ
ユニフォーム粒剤	だいこん	白さび病
クリーンカップ	いちご	うどんこ病、灰色かび病
アニキ乳剤	トマト	コナジラミ類
アニキ乳剤	ねぎ	ネギアザミウマ

表4 果樹・花き

薬 剤 名	作物名	病 害 虫 名
コルト顆粒水和剤	かき	チャノキイロアザミウマ
ザクサ液剤	かき	除草剤
フェニックスフロアブル	なし	シンクイムシ類、ハマキムシ類
コルト顆粒水和剤	なし	クワコナカイガラムシ
コルト顆粒水和剤	ネクタリン	ウメシロカイガラムシ
コルト顆粒水和剤	もも	ウメシロカイガラムシ
アニキ乳剤	きく	オオタバコガ

水稻の除草剤では、近年は生産現場で化学合成農薬を減らす取組が拡大する中で、昨年度に引き続き、成分数を少なくした2成分剤の実証が増加しています。初期剤、初中期一発剤、中後期剤、直播用のいずれも効果が確認されました。大豆では、播種時処理除草剤の効果が確認されました。

野菜では、近年問題となっているネギアザミウマ、ネギハモグリバエ、白さび病等に対する薬剤の効果が確認されました。また、化学農薬と生物農薬を混合した農薬の効果も確認され、薬剤ローテーションや減農薬への対応など、生産現場のニーズに応じた活用が期待されます。

果樹では、カメムシ類、シンクイムシ類、カイガラムシ類など特に問題となっている病害虫に対し、新規農薬を含め、実証剤の有効性が確認されました。今後、これらの農薬を含め、薬剤ローテーションの選択肢が増えたことにより、病害虫防除対策の強化が期待されます。

花きでは、問題となっているオオタバコガに対する実証ほを設置し、実証剤の有効性が確認されました。

検討の結果、実施機関1か所以上で普及性が高い、または、普及性があると評価が決定した農薬は、以下の表のとおりになります。

今後も多くの実証を積み重ね、生産現場への活用を進めることが望まれます。

(新潟県植物防疫協会事務局)

NOSA I中越無人ヘリオペレーター連絡会の活動について

【無人ヘリ防除の現状】

NOSA I中越（高橋俊郎組合長）では、圃場の大規模化や生産農家の高齢化など、農業をとりまく情勢の変化に伴い「産業用無人ヘリコプター」を中心とした損害防止事業を実施しています。平成19年に有人ヘリコプターによる水稲航空防除から無人ヘリ防除へ移行し、年々、無人ヘリ防除の拡大要望が多くなり、平成24年度は、水稲延面積14,408ha（業者委託機含む）、大豆延面積1,368ha、麦延面積296haの防除を実施しました。

水稲防除実施にあたって組合では、農業普及指導センター、行政、管内農業協同組合等関係機関と薬剤選定等について協議を行い、管内全域で害虫、特にカメムシ類を重点にした、殺虫剤1回防除を実施しています。一部の地域では、いもち病や紋枯病を対象とする殺菌剤を追加し、地域に即した薬剤の選定を行っています。

無人ヘリ防除面積の増加に伴い、NOSA I中越では、組合所有の無人ヘリ35機（リース機含む）の有効活用に努めるとともに、農家オペレーターを計画的に養成し、無人ヘリ防除体制の強化を図っています。現在、組合管内では組合センター単位に5地域（長岡、南蒲、嵐南、三島、柏崎）に協議会があり、計113名のオペレーターが所属しています。平成24年度も新たに7名を養成し、年々所属オペレーター数は増加しています。しかし、オペレーターの多くは、専業農家の後継者のため、防除時期と農繁期とが重なり、日程調整に苦慮しています。

【地域協議会の活動】

各地域協議会の活動については、それぞれの協議会の総会や防除実施前の練習会を実施しています。協議会によっては、体力づくりのため、ソフトバレーボールや定期的にボウリング大会を開催したり、オリジナル作業着の作成などを通してオペレーター間の連携強化を図っています。対面資格免許取得者へ取得費用の助成を行っている協議会もあります。

また、防除を実施していく上での安全対策の一環として全ての協議会で年に1回から2回、新潟スカイテックに講師を依頼し「無人ヘリオペレーター安全運航研修会」を実施しています。過去の無人ヘリ事故発生状況を再検証し、安全運航に対する意識啓発を行っています。

その他にオペレーターには、水稲病虫害発生予察調査の調査員としての出動もお願いしています。地域の病虫害の発生状況を把握してもらうことにより、水稲基幹防除の重要性を再認識してもらっています。平成24年度、組合管



無人ヘリオペレーター安全運航研修会の様子
(平成24年3月)

内では延165名のオペレーターが水稲予察調査に出動しています。

また、NOSA I中越では、各地域協議会を統括する「NOSA I中越無人ヘリコプターオペレーター連絡会（現会長：太刀川一）」を平成13年に設立しました。

【連絡会主催無人ヘリ飛行技術競技会】

連絡会の取組みとしては、平成22年度から、無人ヘリオペレーターの操縦技能向上と無人ヘリコプターの安全運航及び農業等散布作業を円滑に実施することを目的に「NOSA I



連絡会主催の飛行技術競技会の様子
(平成24年7月)

中越無人ヘリ飛行技術競技会」を開催しています。各地域協議会より選手4名を選出し、合計20名により競技を行っています。通常散布70mを2往復、枕地散布30mを1往復行い、飛行高度・速度などの安定度、飛行速度の均一性、離着陸・オーバーラン等の安全性を個人ごとに競います。審査は新潟スカイテック株式会社、NOSA I職員にて行い、上位技能優秀者を表彰しています。平成24年度は、7月5日（木）に長岡市和島地区にて開催されました。今後もオペレーターの技術向上に向け、飛行技術競技会を続けていく予定です。

【終わりに】

県内では、毎年無人ヘリコプターによる事故が発生していることから、安全対策が重要となっています。NOSA I中越では、今後も安全対策の徹底を最優先に危被害防止に努めていきます。また、継続的にオペレーターの養成を行い、共同防除体制の維持推進、損害防止事業の体制強化を図り、農家組合員の生産安定と地域農業の支援に寄与していきます。

（NOSA I中越 損害防止課）

編集後記

◆昨年暮れの総選挙により政権が代わり自民党安倍内閣が誕生しました。そして年が改まって2013年、「巳年」のスタート、誰言うともなく蛇の「脱皮」に因んで、新しい年での飛躍、景気回復への期待がこの言葉に込められているようです。景気の「気」は気分の「気」とも言われ、理屈でなくムードも国や政治を動かす上で大切な要素なのでしょうか。

◆当協会が公益社団法人に移行してから間もなく1年を迎えます。公益という新しい衣に馴染んできたとはとても言える状態ではありませんが、一つずつ試行錯誤をしながら進めています。中で、特定費用準備資金の取扱いは公益社団法人としての焦眉の課題です。緊急防除を図るための機器整備への補助事業に対する意向等を確認しながら早期に計画を策定すべく作業を急いでいます。

（事務局）